

「1本の杖の物語」

山形商工会議所議員

高橋 勝幸



今年で86歳になる父は、おかげさまで今も現役で働いている。直営牧場で飼育する牛は（自家産の牛だけでは足りない）ので子牛市場で購入しているが、そのすべて（年間約1200頭）を自ら競り落としている。

父は昭和17年東京陸軍航空学校に入学し、翌年、陸軍少年飛行兵甲種第15期生となった。19年7月に下関から航空母艦「雲鷹」に乗り込みシンガポールに。20年、サイゴンで終戦の報を聞き、12月、赤道直下のリオ諸島の中のレンバン島に収容された。その島は第1次世界大戦で負けたドイツの軍隊が集められ、全員餓死した無人島であった。父は19歳、今から67年前の話である。

収容された翌日から中隊ごとに宿舎を自力で建てた。食糧はイギリス軍から配給される白米（外米）1日100gのみで副食物は無く、日に日に身体が痩せて衰えていった。海辺で貝を拾い海水を煮詰めて作った塩で味付け、猿が口にする

（食べても安全だと判るので）木の実や木の葉を食したりして何とかしのいでいた。イギリス軍から「タピオカ」という芋の苗が支給された。

「自力で作物を作って生きよ」ということだった。それからは農作業に従事する日が続く。が、「タピオカ」は植え付けて20日ぐらいで葉がすべて落ち枯れてしまった。新潟の農家出の仲間が、地面の水分が蒸発するのを防ぐため、自分の葉を根元に落とすためだと気づいた。島は赤道直下にある。そこで2回目の植え付けにはジャングルから木の葉を集め苗の根元に敷き詰め、水を十分に与えたところ、タピオカは見事に大きく育った。知恵で食糧危機を乗り切った。

父はよく話す。「日本人は世界で冠たる民族だ」「もっと誇りと自信を持つべき」と。そこには若き時代の経験、戦時中の耐え忍んだ生活、戦後の焼け野原、どん底から這い上がってきた、という強烈な自負がある。

それに比べて今はどれだけ豊かで幸せな世の中なのか。10数年前のことだ。牛肉問題が起きた時、元気をなくし意気消沈していた私に、オーストラリア人の友達が言った。「日本人はこれだけ豊かな生活をしていながら、二言目には『大変だ、もう駄目だ』と口にする。しかし、世界には日本とは比較にならない苛酷な現実がある。そのことをもっと知るべきだ」と。

私は思います。今の日本の一番の問題は、日本全体が先行きに不安を抱え「前向きな心」と「元気」を失っていることだと。戦後の日本を復興させ今日を築いた先達のエネルギー、そして厳しい世界の現実。不安をことさら口にする前に、苛酷な状況を切り開いてきた過去（歴史）を学び、未来を切り開こうとしている世界（現実）に思いを馳せ、「足るを知る」の精神の下、「前向き」な気持ちで「元気」を取り戻すことが今、必要です。

私の家の床の間には長さ130cm程の黒椰子の棒がある。父がレンバン島から戻る時、やせ細った身体で杖代わりに使った。広島大竹港に復員、汽車で瓦礫以外何も無い上野に、そして山形へその杖をついて帰って来た。遠い赤道直下から来た杖に終戦直後の日本はどんなふう映ったのだろうか？きっと焼け野原で食糧も仕事も金も無く、猛烈なインフレや社会の混乱の中でも「夢と希望」に満ちあふれた日本をみたのではないだろうか。

高橋畜産食肉（株）代表取締役
（写真は黒椰子の杖を手にする父勝氏と高橋氏）